はじめに

筆者の父方の祖父である走出榮八氏（以下榮八氏）は、北海道の農業協同組合で長いこと働いてきた。農業協同組合でどのような仕事をしてきたのかについて聞いた。

第一章　学生の頃から初就職まで

榮八氏は、高校の頃から農協に就職したいと思っていたそうだ。戦前も中学卒業までが義務とされていた時代だ。当時榮八氏が通っていた目名中には六十人程の生徒が在籍、そのうち高校に進学した同級生は８人程らしい。なぜこんなにも少ないかというと、その地域には高校がなく、通うには交通費や学費が多くかかることが原因だ。

　榮八氏は倶知安にある道立の高校に通ったが、「倶知安高校には生徒が百人程いたものの、直接大学へ行った生徒は二十人程だった」と述べており、こちらも現在の54.9%と比べると少ない。

　また、今では当たり前に感じる中学・高校の部活が、当時の榮八氏の学校にはなかったらしい。それも、「家から学校までが遠い生徒が多かったからではないか」と榮八氏は述べている。

　高校を卒業すると、蘭越町農業共同組合に事務職員として勤めたそうだ。ここでは農作物の収穫量予想調査をし、収入保険がどれくらい適用されるかを調べる仕事や、農家からの収穫量の報告を農業共同組合連合会に伝え、農家が不正などをしていないか調べる、などの仕事を４年間ほどしたらしい。

第二章　大学入学から定年退職まで

榮八氏は、４年間働いて貯めたお金で鯉渕学園農業協同組合科という茨城の専門学校に入学し、農協法や、監査士の仕事について学んだ。

鯉渕学園卒業後、北海道農業協同組合中央会に転職をした。そこでは監査員として勤務し、経営の仕組みなどの指導員として道内３箇所に派遣された。

その後、経営監査部次長、監査部長を経て北海道地域農業研究所の事務局長となり、定年退職した。

ちなみに、父方の祖母とは鵡川町の農協で出会ったらしい。筆者の父は、榮八氏が北海道農業協同組合中央会に転職したのち、に生まれたそうだ。

第三章　農業協同組合とは

榮八氏いわく、農協というのは、会員費として集めたお金を収入難などで苦労している農家に貸し付けるという銀行のような役割や、収穫量が平年よりも明らかに低かった時に差額の８割だけ交付される収入保険、生命保険などの根本的な保険の取り扱いをしている。

また、倉庫などの利用料を別途で払うことで収穫した農作物の保管もでき、肥料や農薬などの生産資材も販売しているらしい。

スーパーのように野菜などの収穫物を売っていたり、日用雑貨や衣料品を扱ったりしている農協の店舗もあるそうだ。

取材を終えて

祖父が戦前生まれだということはなんとなく知っていたが、当時の祖父の学校について話を聞くと、今との違いに驚くことがいくつもあった。

また、父が引っ越しが多く、転校を何度もしたと言っていたのは榮八氏の出向や転職が多かったからなのだろう。

今回の取材をしたときに、特にここを聞こうなどと考えていたことを忘れてしまったため、次は全てメモに書いておこうと思った。

榮八氏からは、年代を追ってもっと細かく質問をするといいのではないかとの意見をもらった。

この取材を横で聞いていた筆者の母からは、なぜ農協で仕事をしたいと思ったのかなどなぜということをもっと聞くべきだとの意見があった。